

日本語の後置詞・名詞化辞の交替現象に関する一考察：
有標性と意味の(非)特定性の観点から

堀江 薫・渡部泰門
東北大学大学院国際文化研究科
{khorie, ywatanab}@intcul.tohoku.ac.jp

1. はじめに

言語の形式と意味の対応に関しては、「恣意性(arbitrariness)」と「有契性(motivatedness)」という相反する性質が言語学において指摘されてきた。このうち前者は、人間言語の基本的性質として Saussure 以来広く認められている。一方後者は、言語形式とその表す意味の間に必然的な関係が成立することを指しているが、この性質は、主に擬音語・擬態語のような「周延的」言語現象との関連で指摘され、理論言語学の主要な対象とはなっていない。しかし近年認知言語学(Cognitive Linguistics)、機能言語学(Functional Linguistics)といった言語理論の枠組みの中で、有契性というものが、幅広い文法現象において観察され、決して周延的、例外的な性質ではないということが認められてきた(Haiman 1985, Croft 1990, Givón 1995らの研究を参照)。

言語の形式と意味の微妙な相関関係が明瞭に見て取れる文法現象の一つに次のようなものがある。その現象とは、表面的には自由変異の関係にあるに見える二つの言語形式が、特定の統語環境間で、意味的な要因によって非対称的分布を見せるというものである。日本語においては、この現象は、埋め込み文をマークする名詞化辞「の」と「こと」、発話・思考の内容を表す連体節をマークする補文化辞「という」と「との」や、格助詞をはじめとする後置詞(例えば連体修飾節における「が」と「の」)の交替現象において観察される(「の」「こと」および「という」「との」の交替に関しては、それぞれ Horie 1997a と、渡部 1998を参照)。

本研究では、以下の二つの現象に着目し、一見類似した機能を果たしているように見える二つの言語形式間の選択が認知・機能的要因によって動機づけられていることを、有標性(markedness)、意味の(非)特定性といった概念を用いて明らかにする。

- 一埋め込み文の境界を表示する「の」「こと」という名詞化辞の交替現象(例、「[この地点で事故が起きた] {の/こと} は間違いない」)
- 一「名詞(句)+後置詞+サ変動詞の語幹/サ変以外の動詞の連用形」という構造において、後置詞「の」「による」が交替する現象(例、「[検事 {の/による} 尋問」)

本論文の構成は以下のとおりである。2節では、「の」と「こと」のうちどちらが選ばれるかという割合は統語環境により異なり、「の」と「による」の形式対においてもそうした、異なる統語環境間での非対称的な分布現象が観察されることを、アンケート調査の結果および新聞記事における構文の生起頻度の比較に基づいて示す。3節では、2節に示す文法現象に認知・機能論的観点から説明を与える。4節では、本研究の結論および展望を述べる。

2. 名詞化辞および後置詞の非対称的選択現象

本節では、名詞化辞「の/こと」、および後置詞「の/による」の各交替現象が、単なる自由変異ではなく、統語環境の違いにも一部動機づけられていることを、アンケート調査の結果および新聞記事における構文の生起頻度の比較を通して明らかにする。

2.1 名詞化辞「の/こと」の非対称的選択現象

日本語の述語の項の位置に生起できる埋め込み文のうち、語彙的な意味を持つ名詞を主要部とするもの(いわゆる「関係節」、「同格節」として解釈されるもの)および補文化辞「と」によってマークされるものを除いたものは、通常名詞化辞「の」か「こと」によってマークされる(ただし、ごく少数の埋め込み文は名詞化辞「ところ」、「ゼロ」によってマークされる; cf. Horie 1997ab, 堀江 1997)。

- (1) [3年ぶりに試合に出る] {の/こと} を楽しみにしています。

「の」と「こと」は、例文(1)のように述語(例、「楽しみにする」)の項で且つ主述関係を含むもの(=補文)の境界をマークできる。補文の境界をマークする「の」と「こと」の意味的な共通点、相違点に関しては多くの先行研究がある(先行研究のかなり包括的な概観については野田 1995を参照)。その中でも代表的な研究の一つである久野(1973:140)によると、「の」と「こと」の間には、次のような意味的な相違が認められる。その相違とは、前者によってマークされた補文が『五感によって直接体験される具体的動作、状態、出来事』(例、直接知覚現象)を表すのに対して、後者によってマークされた補文は『抽象化された概念』(例、思考対象)を表すというものである。

久野による意味的な特徴づけは、補文をマークする「の」と「こと」の分布に関してはある程度の説明力を有するが、以下のような「の」と「こと」の使い分けは説明できない。

- (2) [英語を教える] {と/？} で生計を立てている。

例文(1)では「の」と「こと」の両方が生起可能なのに対して、例文(2)では、なぜ「こと」が好まれるのだろうか。例文(1)と例文(2)では、埋め込み文の直後に生起している格助詞が異なっている。例文(1)では埋め込み文は、格助詞「を」でマークされ、述語の項の位置に生起している。それに対して例文(2)では、埋め込み文は格助詞「で」でマークされ、項以外の位置に生起している。

本研究では、埋め込み文が述語の項の位置に生起しているかどうかということ、名詞化辞として「の」と「こと」のどちらが選ばれているかということの間には、相関関係が存在するかということを、日本語母語話者へのアンケートという形で調査した。調査対象は、仙台市の東北大学、東北学院大学、宮城学院女子大学の学部学生である。調査

方法は次の通りである。表1(a)–(h)の計8文を被験者に提示し、()内を適当な語句で埋めさせた。(a)–(c)の例文には()の直後に述語の項をマークする格助詞を生起させ、(d)–(h)の例文には()の直後に項以外の要素をマークする格助詞および複合格助詞(例、「について」)を生起させた。

表1 アンケート調査に用いた例文

- (a) 山田さんは毎月新作の映画に行く()が趣味だ。
(b) 田辺さんは来週映画祭が開かれる()を知りました。
(c) 双葉さんは多くの主婦が家庭で酒を飲んでいる()に驚いた。
(d) 諸岡さんは近所の子供に英語を教える()で生計を立てていました。
(e) 真鍋さんはわずかの間に三人の上司が過労死した()によってその会社の過酷な労働条件を知りました。
(f) 三上さんは煙草の量を減らす()から始めてみました。
(g) 伊藤さんは来年韓国に行く()について両親と相談しました。
(h) 佐藤さんは会社ぐるみで不正が行われていた()に対して憤りを感じました。

調査の結果、表2に示すような結果が得られた。

表2 「の」「こと」の選択に関するアンケート結果の集計

	の	こと	両方	その他
(a) が	153	92	8	1
(b) を	98	146	5	5
(c) に	111	121	4	18
(d) で	9	241	0	4
(e) によって	6	231	0	17
(f) から	3	245	0	6
(g) について	5	230	1	18
(h) に対して	36	197	1	20

表2に示した結果から、例文(d)–(h)のように、埋め込み文が「述語の項以外の位置」に生起している場合には「の」よりも「こと」が選択されやすいという傾向がより強く現れているのに対して、例文(a)から(c)のように埋め込み文が「項の位置」に生起している場合には、上述の傾向はより弱いということが言える。この相違はどのような要因によって動機づけられているかという考察を3節で行うが、その前に次節において「の」と「こと」の場合と類似した非対称的選択現象が、後置詞「の」と「による」の間に観察されることを指摘する。

2.2 後置詞「の／による」の非対称的選択現象

日本語の名詞句でよく用いられるものに、
(3) 名詞(句)+後置詞+サ変動詞の語幹／サ変以外の動詞の連用形
という構造をもった複合名詞句がある。この型の複合名詞

句は、それと対応する文をもつ。例えば、

(4) 専門家{の／による}調査

という名詞句は、

(4') 専門家が調査する

という文に対応している。

(4)のように、複合名詞句において後置詞「の」と「による」が交替するという現象自体は山中(1998:97–98)にも指摘があるが、これら二つの後置詞の間に何らかの使い分けがあるのかという点に関しては、体系的な研究はほとんど行われていない。そこで本研究では、(3)の構造における「の」と「による」の間には選択傾向に違いがあるか、もしあるとしたら、どのような違いか、ということを確認するために、新聞記事中の「の」と「による」の使用頻度を統語環境別に比較した。ただし、(3)における右端の要素が非対格自動詞(=非意図的な動作または状態を表す動詞)である場合、つまり後置詞が動作主(Agent)ではなく対象(Theme)をマークする場合には、次の(5)に示すように「による」は使えない。

(5) a. 資源{の／*による}枯渇(<「資源が枯渇する」>)

b. 心{の／*による}安らぎ(<「心が安らぐ」>)

そこで本研究では、(5)のように右端の要素が非対格自動詞である用例は調査対象から除外した。今回の調査に用いたテキストは、1998年4月21日から6月10日までの『朝日新聞』のweb site「今日の朝刊」(<http://www.asahi.com/paper/front.html>)の「総合面」「経済面」と「社説」(ただし、5月8日の「総合面」と5月22日の全ての記事を除く)および1998年4月21日から25日までの「スポーツ面」である。比較の対象とした統語環境は、以下の(6)に示す四つである。(6)において、語と句の区別は影山(1993:10–11)によった。具体的には、格助詞や屈折語尾などの統語的要素を含むものを句として扱い、それ以外を語として処理した。例えば「株取り引き」のようなものは語として処理し、「株の取り引き」は格助詞「の」を含んでいるので句として扱った。また、「国際的広がり」のような表現は語に分類し、屈折語尾「-な」を含む「国際的な広がり」は句として処理した。

(6) a. 語+後置詞+語

例. 政府{の／による}決定

b. 語+後置詞+句

例. 政府{の／による}環境保全への取り組み

c. 句+後置詞+語

例. 企業のトップ{の／による}決定

d. 句+後置詞+句

例. まちのボランティア{の／による}環境保全への取り組み

結果は、以下に示す通りである。表中「後」は「後置詞」の略である。

表3 「の」と「による」の使用頻度の統語環境別の比較

統語環境	の	による	計
a. 語+後+語	1117(96.0%)	46 (4.0%)	1163
b. 語+後+句	101(73.7%)	36(26.3%)	137
c. 句+後+語	199(95.2%)	10 (4.8%)	209
d. 句+後+句	15(62.5%)	9(37.5%)	24
計	1432(93.4%)	101 (6.6%)	1533

表3から、次の三つのことが分かる。特に(7) b, c が注目される。

- (7) a. 総数で見た場合、「の」の使用頻度が「による」の使用頻度を大きく上回っている。
 - b. 構文(3)の右端が語か句かによって、「の」と「による」の構成比が異なる。
 - c. 構文(3)の右端が語の時に比べ句の時のほうが「による」の使用率は高い。
- (7) c で指摘した点は以下の表4を見るとより明白である。

表4 右端が語か句かによる「の」と「による」の比率の違い

統語環境	の	による	計
X+後+語	1316(95.9%)	56 (4.1%)	1372
X+後+句	116(72.0%)	45 (28.0%)	161
計	1432(93.4%)	101 (6.6%)	1533

次節では、本節で見た「の」と「による」の構成比、および前節で観察した「の」と「こと」の構成比の、統語環境による違いを統一的に説明する。

3. 有標性、意味の(非)特定性の観点からの説明

2節では、名詞化辞の「の／こと」、および後置詞の「の／による」という二種類の文法形式対において、対の一方の、他方に対する使用率が、統語環境によって異なるという現象を観察した。本節では、3.1節でこれら二種類の文法形式対に見られる非対称的選択現象の共通性を探り、3.2節でそれらの現象を認知・機能論的観点から統一的に説明する。

3.1 二種類の非対称的選択現象の共通性

2節で見た二種類の非対称的選択現象には共通点がある。それは、名詞化辞、後置詞のいずれの対においても、一方の文法形式が他方に比べて意味的により特定のであるという点である。この違いは、以下のように単独で「こと」「による」「の」を並列してみると分かる。

(8) こと、による、の
「こと」「による」は、(8)のように通常生起する統語環境(=構文)から切り離されても、それ自体にある種の語彙的な意味が認められるのに対して、「の」は統語環境から切り離された場合、それ自体に特定の意味は認めがたい。

このことは、名詞化辞「こと」は元来『出来事、命題』といった語彙の意味を表す名詞として用いられてきたものであり、後置詞「による」は格助詞「に」に動詞「よる」が後接したものであることから説明される。

このように、名詞化辞、後置詞のいずれの対においても、二つの形式の間には意味がより特定のか(「こと」「による」)、一般的か(「の」)という対立が認められる(名詞化辞「の」と後置詞「の」の認知的、機能的な連続性に関しては、Horie 1998 を参照)。

3.2 非対称的選択現象と有標性(markedness)

前節で見た意味の特定性に関する「の」とそれ以外の二つの形式「こと」「による」の違いは、2節で示された非対称的選択現象と密接に関わっている。名詞化辞、後置詞

のいずれの場合も、非対称的選択現象は特定の統語環境の間で起こっていたが、それら二種類の統語環境の違いを特徴づけるのに有効な概念は「有標性(markedness)」である。有標性は、構造主義言語学の音韻論において提唱された概念であり、「有標(marked)」は「ある特徴(例えば声帯振動)を有すること」を、「無標(unmarked)」は「当該の特徴を有していないこと」を元来は指していた。有標性の概念は、その後、「ある指定されたパラメタに関して中立的、自然、あるいは期待されるもの(=「無標」)と、中立から外れたもの(=「有標」)の間の区別」(Bussmann 1996, 294; 堀江による翻訳)という意味で形態論、統語論にも広く応用されるようになった。有標性の概念は、近年では、世界の言語間で見られる言語現象の生起頻度の異なりや、人間の認知様式との関連で注目されている(Croft 1990, Givón 1995 を参照)。

2節で観察した非対称的選択現象は、一方が名詞化辞、他方が後置詞、という違いはあるものの、いずれも「有標」の統語環境に、意味的により特定のな形式(「こと」「による」)が用いられているという点で共通である。

まず名詞化辞の選択に関してであるが、2.1節の表2の結果を見ると、例文(a)から(c)においては、「の」と「こと」の間にそれほど明瞭な選択上の優位性が認められないのに対して、(d)から(h)においては、「こと」が「の」に優先して選ばれる傾向がより強いことが分かる。

この二種類の統語環境は、2.1節でも簡単に述べたように前者(a-c)が「述語の項の位置に埋め込み文が生起している環境」、後者(d-h)が「述語の項以外の位置に埋め込み文が生起している環境」という違いがある。述語の項の位置というのは、述語の意味構造と埋め込み文の生起の間に必然的なつながりがある、言い換えれば、埋め込み文の生起が通常(つまり「無標」)であるような統語環境である。例えば「知る」という述語の項としては「イラクがクエートに侵攻したこと」のような埋め込み文が来ることがごく自然である。これに対して、述語の項以外の位置というのは、述語の意味構造と、埋め込み文の生起の間に必然的なつながりがなく、埋め込み文が生起することが通常ではない(つまり「有標」)の統語環境である。例えば、「生計を立てる」という述語の意味構造から、「英語を教えること」という埋め込み文の生起は必ずしも予想できない。

では、有標の統語環境において、より意味の特定のな「こと」が「の」に優先して選択されるのはどのような要因によるものだろうか。本研究では、「こと」の持っている語彙的な意味が、通常生起しない統語環境に埋め込み文が生起しているという「有標」の事態に対して注意を喚起する役割を果たしていると考える。埋め込み文の生起が通常で、予測可能な統語環境においては、埋め込み文の存在そのものに特別な注意を喚起する必要がなく、『名詞節の境界表示』という統語的な機能のみが要求される。このような統語機能は、「こと」のみならず「の」も十分に果たすことができるため、表2の例文(a)から(c)においては「の」と「こと」の間に顕著な選択傾向の違いが見られなかったのである。

「の」と「こと」の選択において観察された、無標の統語環境は有標の統語環境に比べて生起する文法形式の選択の幅がより広いという現象は、一般的なものである。例えば、英語においても、述語の項の位置で埋め込み文をマー

クする形式(補文化辞)としては、「定形節(典型的にはthat節)」「to不定詞」「動名詞」という三種類の形式があるが、項以外の位置に埋め込み文が生起している場合は、動名詞以外は生起できないというように選択の幅が大幅に制限される。

(9) a. I remembered {that John had come/to lock the door/locking the door}.

b. I made my living by {teaching English/*to teach English/*that I teach English}.

次に後置詞の選択に関してであるが、前節では、「による」は「の」と異なり語彙の意味を有しており、意味的により特定のであることを述べた。そのことは、

(3) 名詞(句)+後置詞+サ変動詞の語幹/サ変以外の動詞の連用形

という構造において右端の要素が句の時に、特に「による」の使用率が高くなっていることとどう関わっているのだろうか。2.2節の表4には次のような数値が示されている。今回調査対象とした、(3)の構文で「の」または「による」を後置詞とするものの総数は、1533 であった。そのうち右端の要素が語であったものは 1372、句であったものは 161 であった。つまり、句であったものは全体の10.5%に過ぎなかった。したがって、「の」または「による」を後置詞とする(3)の構文において右端の要素が句の場合というのは有標の統語環境と言える。統語環境が有標の場合、意味の点からもそのことが示されていると、形式と意味の有契性の観点からは理想的である。そこで意味的により特定の「による」の使用が意味をもってくる。つまり、「による」には、文法的意味を表すことを本務とする機能語には基本的に不必要な語彙の意味が残存しているが、そのこと自体が、当該の複合名詞句が統語的に有標であることに読み手の注意を喚起する上で役に立っているわけである。以下に一点だけ補足する。

「の」と「こと」の形式対では、統語環境が有標の場合には、「こと」の使用頻度が「の」の使用頻度を上回っているが、「の」と「による」の形式対では、統語環境が有標の場合でも、「の」の使用率が依然として高い。このことは、形式と意味の有契性よりもさらに強く働いている要因の存在を示唆している。そうした要因としては、例えば次の二つが考えられる。一つは、「の」は本研究で扱っている(3)の構造以外にも、「名詞(句)+の+名詞(句)」という形でより広い範囲に分布する無標の形式であるという要因である。Croft(1990:81, 85)によると、より広い範囲に分布する形式は無標の形式で、一般に無標の形式は、有標の形式に比べ使用頻度が高い傾向にある(分布を基準とした有標性の概念の、名詞化辞「の/こと」の選択現象への応用例として、堀江1996:154を参照)。もう一つは、「の」は「による」よりも音節数が少ないために、言語産出や言語理解といった処理の際の負担が少なくて済むという要因である。

以上、本節では「の/こと」および「の/による」の両方の文法形式対に見られる非対称的選択現象が、「統語環境の有標性を、文法形式が持っている語彙の意味によって示す」という共通の要因によって動機づけられていることを論じた。

4. おわりに

本研究では、交替を見せる日本語の名詞化辞の対、後置詞の対に共通して観察される現象として、統語環境が異なれば対の一方の他方に対する使用率も異なってくることを、アンケート調査の結果および新聞記事における構文の生起頻度の比較に基づいて指摘した。さらに、上に述べた、異なる統語環境間での非対称的選択現象の本質を、有標性および意味の(非)特定性の概念を用いて分析した。今後は、他言語、ことに類型論的特徴を異にする言語における同種の非対称的選択現象を調査し、今回の分析結果の一般性をさらに高めていきたい。

謝辞

本研究は、堀江薫に対する平成10年度文部省科学研究費「奨励研究A(代表、課題番号09710365)」、「基盤研究C(分担、課題番号10610522)」、平成10年度文部省リサーチアシスタント経費、および三島海雲記念財団学術奨励金の援助を一部受けて行われています。

参考文献

- Bussmann, Hadumod. 1996. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. London: Routledge.
Croft, William. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
Givón, Talmy. 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
Haiman, John. 1985. *Natural Syntax: Iconicity and Erosion*. Cambridge: Cambridge University Press.
堀江 薫. 1996. 「有標性の観点からみた日本語の補文化辞『こと』・『の』の選択」『日本認知科学会第13回大会論文集』154-155.
堀江 薫. 1997. 「構文から見た日本語らしさ」『日本語学』16-7: 14-22.
Horie, Kaoru. 1997a. "Three types of nominalization in Modern Japanese: *no*, *koto* and *zero*." *Linguistics* 35-5: 879-894.
Horie, Kaoru. 1997b. "Reanalysis as a means of "recycling" conventionalized expressions: a case study from Japanese." *Proceedings of the 16th International Congress of Linguists*. (CD-ROM) Oxford: Pergamon. (Paper No. 0400)
Horie, Kaoru. 1998. "On the polyfunctionality of the Japanese particle *no*: from the perspective of ontology and grammaticalization." Ohori, Toshio. (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*. 169-192. Tokyo: Kurosio Publishers.
Horie, Kaoru. To appear. "Core-oblique distinction and nominalizer choice in Japanese and Korean." *Studies in Language*.
影山太郎. 1993. 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
久野すすむ. 1973. 「『コト』、『ノ』と『ト』」『日本文法研究』東京: 大修館書店. 137-142.
野田春美. 1995. 「ノとコト」『日本語類義表現の文法(下)』東京: くろしお出版. 419-428.
山中桂一. 1998. 『日本語のかたち』東京: 東京大学出版会.
渡部泰門. 1998. 「日本語同格節構文の3つの型の選択モデル」『言語処理学会第4回年次大会発表論文集』326-329.